

消えたガスの匂い

河上美智子

ふと午後の昼下がりにゆっくりしようかと近くの不二家レストランのファミレスへ、何かドリンクバーで飲もうと私はやって来た。

レジ横にあるペコちゃん人形が、客の子供に頭を触れられては、ゆらゆらと頭を揺らして私を出迎えてくれる。

まるで「おばちゃん、いらっしやーい」と言うように。

中は混んでいたが、幸い窓際のテーブルに座れた私はドリンクバーを注文して、ドリンクコーナーへ行き、ウーロン茶を取って来て席に着いた。

店の脇の車道沿いに立っている向こう側のマンシヨンを見ると、南側の窓に陽が当たり明るい感じだ。

「ああ、幸せだな」と思って、ウーロン茶を一口飲むと、大きく息をついた。

いろいろな愚痴も言うが、子供たちも大人になり手が掛からず、主人も大人しい男で乱暴な人ではない。

お金に細かい男でケチだが、まあ何かあるとしたら、そのくらいだろうか。

考えてみれば、こんな私と結婚してくれ、二人の可愛い子供達のお母さんにしてくれたのだから、有り難い男だ。

若い頃、入学した会話学校の友人や職場で酷いじめに遭い、精神を病んでしまった私は、こんな私と結婚してくれるような男の人なんていないんじゃないか、ひよっとしたらわたしはずっと独身かもしれない。

そう思うと寂しがり屋の私は、淋しくて凄く堪えられなかったのを思い出す。

唯一主人だけ交際してくれ、結婚してくれたのだった。

随分苦労も人様のお陰でさせられ、生涯治らない病気にまでされたが、今はやっと幸せになれたと、ひしと感じた。

ウーロン茶の入ったコップには、ペコちゃんとポコちゃんのイラストが付いている。

コップを手にした私は持ち上げて、窓外のマンシヨンの景色を映して眺めた。

ペコちゃんとポコちゃんが窓の位置にあり、さながら明るい窓から、こちらを見ているようだ。

今も幸せを取り戻せたが、ここまで来るのは長かった。

振り返れば子供時代は幸せだったと思つたとき、私の脳裏に遠い記憶が鮮やかによみ返つた。

私が中学生の頃だつたと思う。

弟の一夫は小学四、五年生くらいだつた。

姉の私も女の子のわりにヒョーキン者で、何かと言えば、おかしな真似が始まる女の子だつた。

またオナラの失敗が度々あるという、かなり恥ずかしい女の子だつた。

ただ一応気にして、うっかり出ないか、出ないかと神経質になり過ぎたからだろうか。神経性の腸内異常発酵を起こしたらしく、毎朝登校時に、何だかお腹が苦しい気がして、よほど歩きながら出そうかと思つたが、すぐ後ろに人が歩いていて、その人に聞かれたら困ると思ひ、もうしよっちゅう後ろを振り返り、誰もいないと確認して、歩きながらブーっと出すという有り様だつた。

当時クラスで友人にも言えなかつた。

一人悶々悩んでいたくらいなのだ。

その私も家ではリラックスし、一日の学校であつたことを母に話し、楽しくしては、家庭を明るくしていた。

ある日、一夫が学校から帰つて来ると、急にオナラは燃えるんだつてと、言い出し、オナラを採取し、そこにマッチで火をつけて燃焼させると言い出した。

さすがは私の弟だ。言うことが違うと痛感した。

一夫の言うには、空いた牛乳瓶の口をお尻の穴にピッタリ着けて、オナラを瓶の中に出し、すぐに手で瓶の□を塞ぎ、マッチの火をつけたのを、一瞬瓶の口を押さえた手をずらして中に入れると、中に溜まつたガスが燃焼するというのだ。

話を聞いた私は、確かにオナラは一種のメタンガスなので、火をつけると燃えるという話が、何かの雑誌にあつたと思つた。

母も一夫の話を聞いて、どれどれ、やってみると、乗り気になつた。

私も是非知りたいと思ひ、ヒョーキン者の姉なので、やってみようと言ひ出した。

そして実家の廊下で三人集まり、母が当時毎日取つていた雪印牛乳の空き瓶を一本持つて来て、一夫が出そうだと言つたときに、ズボンを下ろし、お尻の穴の辺りに瓶の口をぴったり着けて、私がマッチを持って来て、一夫が出すと言つてオナラを出した瞬間、母がさつと瓶の口を塞ぎ、私はマッチに火をつけて、母が手をずらした瞬間、そのマッチを瓶の中に入れると、一瞬青白い炎になつたような気がしたが、ほんの一瞬の出来事だつた。

私が瓶の中の匂いをかいたが、オナラは見事に燃焼したのか、何も匂わない。

その瞬間、廊下で三人の「わあっ」という声が響いた。

私が、「凄い、全然臭くないよ、オナラって本当に燃えるんだね」と言うと、他の二人も、「面白い、またやろうよ」とか、「へえ、オナラは燃えるつて本当なんだ」と言って、廊下で明るく笑って騒いでいた。

そうして、それ以降も三回くらいだろうか。廊下で母、私、一夫の三人が集まっては放課後に学校から帰って来ると、一夫が、オナラが出そうだと言っては、どれどれと牛乳瓶やマッチを持って廊下の中央辺りで、オナラの燃焼実験をやらかして、その度に廊下いっぱいに笑い声が響き、「わあっ」と歓声を上げては、「凄い。一瞬青白かったよ。きっと燃えたんだね、ガスがね」、「学校でも話してみるよ」、「本当だ。全然臭くないね」、「へえー、知らなかったよ。オナラが燃えるつて本当なんだ」、「何ととっても、メタンガスっていうくらいだからね」、「うーん、凄いね」と騒いで盛り上がっていた。

三人とも笑顔で、オナラをした張本人の一夫もニコニコし、母も大笑いで、私も面白くてニコニコだった。

私も素直な女の子だが、一夫も真つ直ぐな伸び伸びした性格の男の子だ。

私達は、こうしたオナラに関するおかしな真似にも、ノリノリで乗って来るような母の元に、屈託なく真つ直ぐと、伸び伸びした子供に育てられた。

後に社会へ出てから、暗い家庭に生まれ育ち、性格の屈曲した人に随分と出会い、散々な目に遭わせられたが、それにも関わらず私自身が素直さを保ち続けられたのは、こうした家庭や母の元に育てられたからと言って過言ではないと思えてならない。

主人も結婚した当初、私が、どうして私と結婚しようと思ったのかと訊くと、主人が、「初めてここまで素直な人に会った、私ほど素直な人であったことは無かった。初めて会った」と、言ってくれた。

私は涙が出そうに嬉しかった。

いろいろあったが、結局このままの私で良かったのだと痛感したのだ。

あの古い木造家屋の実家はとうに無く、今どきの新しい家に建て替えられている。

まだ社会を知る前、全然幸せなばかりだったあの頃、古い家の廊下に私達母子三人の笑い声が響いたのは、五十年以上も前のことだ。

ペコちゃん、ポコちゃんのイラストの付いたコップを持ち上げて、通り向こうのマンションの窓の位置に持って見てみると、薄茶色のウーロン茶を通して、幸せそうにべろりと舌を出して笑うペコちゃんとポコちゃんが映る。

私の好きな歌に、松任谷由実がまだ荒井由実だった頃の歌で、「海を見ていた午後」というのがある。

あれは失恋の歌の様だが、横浜のレストランの海に見えるテーブルから、外の海を眺めて歌った素敵な一曲だ。

ソーダ水の中を、貨物船が通るといのだが、きつと歌の中の主人公も、ソーダ水の入ったコップを持って、そのコップを通して窓外に広がる海を映しては、涙の出そうな想いに浸ったのだろう。

ペコちゃんが姉の私で、ポコちゃんが一夫に見えた。

実際、父が撮った子供時代の写真に窓の前に二人立ち、手を広げて笑った瞬間を撮った一枚があった。

あの頃は幸せだった。

相変わらず、たまにオナラによる失敗をやらかす恥ずかしいおばさんになった私だが、そう思うとウーロン茶の入ったコップを通して映る景色を眺める私の目が、こぼれはしないが、涙が出そうになった。

あれから五十年以上経つ。

ふと、コップを持っていない方の左手の指でそつと両眼を拭いた。